

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02014

研究課題名（和文）東京臨海部を対象とする現代大都市の空間的・時間的構造の社会学的研究

研究課題名（英文）A sociological study of the space-time structure of a modern metropolis in the Tokyo waterfront area

研究代表者

若林 幹夫（Wakabayashi, Mikio）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40230916

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東京臨海部が東京大都市圏の空間と時間の社会的編成の構造において占める位置・機能・意味・イメージを、大都市社会の空間と時間の編成の通時的過程と共時的構造において明らかにし、そのような経験的研究を通じて現代の巨大都市の社会構造を記述・分析し、理解するための新たな理論と方法を探究することを目的とした。巨大都市東京の最中心部であると同時に、埋め立てや海岸線沿いの拡張が可能な臨海部の特異なトポスを、異なる速度の交通体系が可能にするレイヤーの重層とインフラ施設の集積、巨大スケールの空間の並存という点から明らかにし、そうした都市の時間的・空間的編成のための理論の枠組みの展望を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代大都市の形成と存在の形態を、異なる速度とスケールをもった複数のレイヤーの重層として理解することができることを、東京臨海部という具体的な地域に即して実証的に示すとともに、そのような重層的なレイヤーとスケールをもった現代大都市の構造を解明する理論的構築を試みた点に、本研究の学術的意義がある。

現代大都市に対する行政や民間企業による開発および再開発にとっても有意義な視点を提供している点に、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the diachronic process and synchronic structure of the organization of space and time of Tokyo waterfront area. It also aimed to explore new theories and methods for analyzing, and understanding the social structure of contemporary megacities through such empirical research. We clarified the unique topos of the waterfront area, which is the most central part of Tokyo and at the same time allows for land reclamation and expansion along the coastline, in terms of the juxtaposition of layers of traffic systems with different speeds, the concentration of infrastructure facilities, and spaces on a big scale, and presented a theoretical framework for the temporal and spatial organization of such a city.

研究分野：社会学

キーワード：東京 臨海部 巨大都市 メディア表象 スケール オーセンシティシティ/ジェネリシティ 東京港/江戸湊 横浜港

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

東京臨海部は陸と海が接する河口・湾であるという自然地理学的な基盤の上に、歴史的に異なる段階で形成された埋立地や諸施設、そこでなされる諸活動やそこに付与される意味やイメージによって、東京都心に隣接する場所に「都心」とも「郊外」とも異なる特異な巨大空間とし形成されてきた。港湾としての機能を果たしつつ、断続的に埋め立てられ造成された土地に生産・流通・消費・居住・廃棄物処理などの多様な用途の施設が建設され、戦後に限っても、高度経済成長期の埋め立てと工業・流通業・商業・娯楽施設や集合住宅などの建設、1980～90年代の都市の構造転換に伴うウォーターフロント開発や臨海副都心の開発、豊洲市場移転問題や2020年開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックに向けた施設建設など、時代ごとに異なる政治的・経済的・社会的状況と課題の下に開発や再開発が行われ、新しい産業活動や生活様式や消費文化等が生み出されてきたのである。その結果、東京臨海部は巨大都市の副都心的な機能を果たすと同時に、住宅団地やタワーマンション、ショッピングモールや娯楽施設などが立地し、物流施設や工場・発電所・廃棄物処理場なども数多く立地する郊外的側面も併せ持ち、さらに港湾・交通・鉄道・自動車道路・新交通システムなどの交通施設と倉庫・物流施設が高密度で集まった、特異な位置と複合的な機能・構造とスケールをもった空間として形成されてきた。グローバル化と情報ネットワーク化やロジスティクスの高度化が進む現代世界においては、近代都市化を通じて形成されてきた大都市臨海部の開発や再開発は世界の大都市の多くに共通する課題であり、東京臨海部もその例外ではないが、東京大都市圏とその臨海部のこうした歴史と現状に対する実証的な調査・研究はいまだ十分になされていなかった。また、そうした実証的課題に応えるような理論が、社会学、地理学、建築学、都市工学、交通工学、経済学、人類学、文化論などで蓄積されてきた一方で、それらを学際的に架橋する「現代大都市の理論」の構築もその途上にあった。本研究課題はこれらを背景として計画・開始された。

2. 研究の目的

本研究は、東京臨海部が東京大都市圏の空間と時間の社会的編成の構造において占める位置・機能・意味・イメージを、大都市社会の空間と時間の編成の通時的過程と共時的構造において明らかにすることと、そのような経験的研究を通じて現代の巨大都市の社会構造を記述・分析し、理解するための新たな理論と方法を探究することを目的とした。さらに、それらを通じて「現代都市とは何か」、「現代社会にとって都市とは何か」という問いに答える都市の社会学の理論の新しい可能性と方法を探究し、現代大都市社会の現状とそれが内包する社会的諸課題の解明に資する実証的及び理論的な知見を発信することも目的とした。

東京臨海部は、大都市圏の中心でありながら海洋に面した港湾や河岸・海岸であり、埋め立て地でもあるという特異な立地をもち、現代の大都市における人・モノ・情報の配置・流通の構造の変動に対応する変容が集中的に顕在化する広大な空間である。しかしながら、東京臨海部がまさに「臨海部」であることに注目し、その複合的な機能や構造を調査・分析した研究は多くない。また、グローバル化と情報ネットワーク化に伴う大都市のリストラクチャリングやジェントリフィケーション、都市空間の生産や交通・流通と関連する社会の空間的・時間的構造の研究、資本や行政による都市イメージの生産と時間消費型消費についての研究が社会学およびその隣接領域で近年蓄積されている一方で、東京臨海部のように巨大スケールで複合的な機能と構造をもつ空間を対象として、それらの視点を複合して取り組んだ研究もほとんど存在しない。本研究は、上記のようにいまだ十分に分析されていない大都市臨海部が、大都市圏及びより広域的な社会圏の構造において占める位置・機能・意味の重層性を、経験的なフィールドワークや資料調査と、社会学のみならず地理学、建築学、都市工学、交通工学、経済学、人類学、文化論等で形成されてきた都市論の理論を複眼的に用いて解明すると共に、それを通じて現代都市の巨大なスケールと複合的・重層的な構造を記述・分析するための都市論の新たな理論と方法を構築し、現代の都市論に学術的かつ創造的な新たな展望を開くことを目的としたものである。

3. 研究の方法

都心に隣接するという点で巨大都市東京の中心であり、かつまたそこで都市が海に接するとともに造成によって新たな都市空間が拡張されていく場であるという点ではその周縁である湾岸＝臨海部の空間と、そこでの社会的諸活動・諸経験の時間的・空間的な編成の構造と変容の過程を対象化し、記述・分析するために本研究は、東京大都市圏における臨海部の社会的地層・地形・イメージの重層性、交通・流通のインフラ空間としての東京臨海部、巨大スケールの空間と施設の社会的意味、という三つの焦点を設定し、この巨大空間を通時的に形成してきた地理的・社会的・文化的な“地層”の重層と、それらが形成する諸領域の共時的な隣接・接合・分離の場所論的構造が生み出す社会的な“地形”、その領域の社会的な認知や了解を支えるイメージの構造を、物理的空間の形成とその社会的背景、形成された空間に付与される社会構造上の位

置・機能・意味・イメージという点から記述・分析することを目指した。そのため、(1) 社会学にとどまらず、地理学、歴史学、都市工学、建築学、表象論などの隣接諸領域にわたる、東京臨海部に直接・間接にかかわる先行研究の調査、(2) 都市社会学、都市地理学、人文社会地理学、自然地理学、都市工学、建築学、交通学、経営学などにまたがる、本研究課題に関連する理論的・方法的な先行研究の調査、(3) フィールドワークとインタビュー、(4) 上記(1)～(3)をふまえた研究メンバーによる検討を通じての考察により、研究を進めることとした。

東京大都市圏における臨海部の社会的地層・地形・イメージの重層性については、この巨大空間を通時的に形成してきた地理的・社会的・文化的な“地層”の重層と、それらが形成する諸領域の隣接・接合・分離の場所論的構造が生み出す社会的な“地形”、その領域の社会的な認知や了解を支えるイメージの構造を、物理的空間の形成とその社会的背景、形成された空間に付与される社会構造上の位置・機能・意味・イメージという点から、収集したデータやフィールドワークにもとづく分析と考察をおこなった。その際、文化人類学的な中心・周縁論、都市社会学的な都心・郊外論、世界都市論、土木・都市工学的な立地論や空間論、建築学的な巨大空間論、社会地理学や文化の政治学におけるスペクタクル空間論と時間消費論、交通・流通工学や経営学におけるロジスティクス論、メディア論、環境イメージ論などの諸理論を学際的に架橋し、近世城下町から近代国民国家の首都となり、産業化、消費社会化、情報化、グローバル化を通じて大都市圏の中心となり、世界都市化していった東京の臨海部の構造を、ヴィジュアルデータ・テキストデータ・フィールドワーク・インタビューなどを用いて a)自然空間、b)社会的に形成された空間、c)そこでなされる社会的諸活動、d)それらを通じて生産・流通・消費される意味やイメージの重層構造として、通時的かつ共時的に明らかにすることを試みた。これらの分析によって、断続的な埋め立てや再開発によって、その輪郭がたえず書き替えられ、人間的スケールを超越し、その輪郭や全貌が捉えがたい曖昧な場所としての東京臨海部の全体的な構造の解明を目指した。

交通・流通のインフラ空間としての東京臨海部の研究については、東京の近代都市化・世界都市化の過程で臨海部において東京を中心とする物流・流通システムがどのように形成され、それが東京および周辺地域の都市空間の構造と、社会的諸活動の時間的構造や過程をどのように構築してきたかを、とくにロジスティクス概念の普及と実践、及び情報ネットワーク化による物流・流通システムの変容が、物流・流通拠点をどのように編成し、臨海部を中心とする都市空間、都市景観、都市経を構築してきたかという点から解明することを試みた。その際、運河、埠頭、産業道路、飛行場、発電所、ポンプ場、斎場、倉庫、物流施設など、都市空間の周縁部に多く、「裏方」のような存在であった都市インフラが、高度成長、消費社会化、情報社会化のなかで、東京臨海部の居住地域や消費施設とどのように共存し、どのような都市空間、都市景観、都市経験を作り出したかに特に注目し、ヴィジュアルデータ、テキストデータ、フィールドワーク、インタビューなどを複合的に用い、隣接する横浜地区との比較調査もおこなうことで、東京臨海部の構造と変容を都市インフラと都市空間の現代的関係の分析と考察をおこなった。

巨大スケールの空間と施設の社会的意味については、通常の建築物・建造物を超える巨大スケールのオープンスペース(公園・広場、通路・道路、海辺・川辺など)や巨大な建築施設(商業・公共施設、交通・通信施設、流通・物流施設、娯楽施設)が建設されてきたこの地域がどのような都市空間、および都市経験を形作ってきたのかを、戦前・戦後東京における既存の市街地・盛り場と比較しながら分析した。また、東京臨海部に見られる巨大建築・施設を、有名建築家が設計した「図としての巨大建築」(東京ビッグサイト、幕張メッセ、テレコムセンター、お台場フジテレビなど)と、無名性を帯びた「地としての巨大施設」(物流倉庫、廃棄物処理場、エネルギー処理施設など)に分類し、設計主体、機能、建築面積・延床面積を整理し、両者の建築・施設を支える美学と工学、形態や表象、立地条件などの比較もおこなうとともに、従来は一括りにされがちであった埠頭を、フェリー埠頭とコンテナ埠頭の「用途別」、1960年代の品川埠頭、70年代の大井コンテナ埠頭、90年代以降の青海コンテナ埠頭の「時代・立地別」に区分し、その規模や社会的位置づけを、産業構造の転換という点から整理した。これらの調査・分析にあたっては、ケヴィン・リンチの都市のイメージについての分析概念や、ビッグネス、ヴォイドネス、ジェネリックシティなどのレム・コールハースの概念を導きの糸とし、研究分担者の南後の在外研究を活用して、オランダ、イギリス、アメリカ合衆国における臨海部の開発状況や歴史についての資料収集とフィールドワークにもとづく比較検討もおこなった。

最後に、これら三つの焦点による調査・分析の結果から、東京臨海部の空間構造と時間構造の総体的構造を描き出し、グローバル化とネットワーク化による大都市の空間的・時間的秩序の現代的変容を分析し、臨海部を構成する空間的要素の実態・機能・イメージ上の特徴を明らかにするための考察のための討論と検討をおこなうとともに、現代大都市を記述・分析し理解するための新たな都市の理論の検討をおこなった。

4. 研究成果

「江戸」というかつての名称が示す通り、東京は荒川・隅田川・多摩川が東京湾に流れ込む河口・沿岸であるという自然地理学的地勢を基層に、中世から近世の河川の改修や運河の開削によって形成されてきた水上交通体系が、日本橋を起点とする街道による陸上交通体系と接続され、これが重なり合う場所に形成された都市である。それはこの都市が、「ウォーターフロント」

という“水に面した都市”である以前に、交通空間としての河川や海の“上”に成立した都市であることを意味している。幕末・明治開化期には開港地となった横浜が“東京の港”としての機能を担う一方で、東京から横浜にいたる沿岸の埋め立て(=大都市が生み出す廃棄物の新たな土地への転換)や運河建設による産業立地としての価値の増大など、東京臨海部は近代産業都市化の「フロンティア」となった。臨海部と都市中心部が隣接することにより、近代都市東京は「都心=中心/郊外=周辺」という二重同心円構造ではなく、「臨海部=中心に隣接した周縁的空間/都心=中心/郊外=周辺」という三重の同心円構造をもつと同時に、最中心の臨海部から東京湾に沿って京浜・京葉地区へと都市が線状に拡張するという、特異な社会的地形を形成したのである。こうした空間構造は、東京に限らず海洋に面した多くの大都市に共通する。

第二次世界大戦後には東京都心部の都市機能および人口の過密に対する対策として、行政、経済界、建築家、工学者などにより、東京湾の大規模な埋め立てや人工島の建設、東京湾横断道路の建設とそれにそった新たな都心の建設など、湾岸地域を自由に計画や構想を書き込める「白紙」とみなす未来都市的な計画が多く発表された。また1980年代以降には臨海副都心や横浜みなとみらい21地区、千葉市幕張新都心など、産業構造の転換による消費社会化・情報化・グローバル化を受けた新たな都市像がこの地域に投影=計画(project)され、大規模な開発および再開発が進められてきた。これらが示すのは、首都であると同時に産業都市でもある東京が、それぞれの時代に直面してきた課題の解決の場として、臨海部というフロンティアが存在してきたと同時に、この空間が未来に向けた都市や産業や生活の理想やイメージが投影される場でもあり続けてきたことを示している。かつては多摩川河口の漁港であり、郊外行楽地でもあった羽田に建設された羽田飛行場が、戦後は東京国際空港となった後、いったんは国際線機能を「新東京国際空港=成田空港」へと外化しようとしたが、グローバル化とそれによる都市間競争の激化を背景に、埋め立てによる空港拡張によって再度国際線の拠点機能を強化し、さらにショッピングやエンタテインメント的な機能をもつようになっていった過程は、東京臨海部の社会的地形のそうした変容を象徴的に示している。臨海部を焦点とする東京の社会的地形のこうした歴史的展開は、水の都(近世) 陸の都(近代) 空の都(現代)という時代区分を枠組みとして捉えることができるが、この区分は通時的な変遷としてよりもむしろ、都市の社会的地形において共時的に重なり合って存在するレイヤーである。

巨大都市東京臨海部の社会的地形を構成するこれら三つの層は、小舟から大規模船舶による水上交通、人間の身体、自転車、自動車、鉄道による陸上交通、航空機による空中交通という、速度も運送量も異なる複数の交通によって形成されており、それが東京という現代都市の社会的地形の時間的編製の重層性を生み出している。そもそも臨海部は港や船着き場によって水上交通に開かれた空間であると同時に、通常の道路および高速道路、複数の旅客・貨物路線、空港による東京大都市圏の多様な交通が集中・輻輳する領域であり、埋め立てによって倉庫、コンビニナート、エネルギー施設、廃棄物処理施設などが集中する空間でもある。臨海部のこうしたあり方は、東京臨海部を大都市圏の“巨大なバックヤード”とし、日常生活とは異なる時間的・空間的なスケールで社会的諸活動がおこなわれる空間を生み出している。その一方で東京臨海部および湾岸地区には、みなとみらい21地区、臨海副都心のお台場、有明、豊洲、晴海、夢の島などのように、巨大都市が生み出した廃棄物の埋め立てや産業構造の転換によって生み出された大規模な空間が、消費やエンタテインメントの場として形成されており、大規模な住宅団地や高層マンション街も建設されてきた。ウォーターフロント開発の先行事例である横浜港周辺と比較的新しく開発が行われた東京臨海部の比較分析からは、臨海部・湾岸の諸地域における既存市街地との関係や、歴史性、開発主体、具体的な空間構成を通じてバックヤード(インフラ)として確保された巨大空間が、これらの地区の再開発においてオーセンティシティ/ジェネリシティを構成するメカニズムと構造に密接に関係していることも明らかになった。

巨大スケールの空間と施設の社会的意味は、上記のような臨海部・湾岸の社会的地形や、そのインフラ空間としてのあり方と相関している。埋め立てや再開発が生み出した空間は、そのスケールの巨大さゆえに、通常の歩行者の視点からは個々の場所や施設の一部しか知覚・認識することができない巨大な空間単位が、相互に強い連関をもたないまま並存している広がりを生み出した。とりわけ1990年代以降の情報化の進展は、多くの物財や人びとを集められる大規模空間へのニーズを高め、レム・コールハースが「ビッグネス」と「ヴォイドネス」という概念で主題化した特徴をもった、消費・流通・物流施設の巨大な空間を臨海部に生み出した。そこでは明治以降の産業化が生み出してきたテクノスケープに、産業構造の転換による消費社会化や情報化が生み出した新しいランドスケープやイメージスケープが“重ね描き”されており、こうした巨大なヴォイドやハコと、それらの間を縫うように走る交通経路が生み出す都市経験は、たとえば吉見俊哉が『都市のドラマトゥルギー』で描き出した東京都心部の「舞台としての都市空間」における都市経験とは異なる、現代的な都市の経験や知覚を湾岸地域にもたらすことになった。

さらに、それぞれの棟が自立した住宅地を大量・高密度に封じ込めたような高層マンションとそれが可能にする俯瞰的なまなざしも、既存の都市空間から居住者の身体と意識を切り離し、視覚的な像として都市を領有する場に多くの人びとを組み込んでいる。かつてはもっぱらオフィ

スにおいて経験されたものが、個人の生活空間でも経験されるものとなっているのである。本課題の研究期間に起ったコロナ禍とそれによるリモートワークの展開を経て、より顕在化・一般化したこうした視覚と場のあり方は、映画などのメディアにおける東京臨海部の表象分析によって明らかになった、都心から外縁の東京臨海部へ向けられるまなざしとその逆へ向けられるまなざしの交差、物理的距離と心理的距離の重なり合い、ヒューマン・スケールと非ヒューマン・スケールの差異がもつ、現代大都市のスケールと社会的意味を理解するうえでの重要性とも照応している。

東京湾岸・臨海部を対象とする以上の調査・分析と考察から、現代の大都市を社会学的に理解するための、次のような理論的な視点と課題を得ることができた。都市という空間的・場所的な社会形態の構造は、自然地理的な条件の下に形成された交通体系の“上”に成立し、歴史的に変化していくが、それはまた、そのように成立した空間的・場所的な社会形態の“内”に内包された交通体系とそこでの実際の人・モノ・情報の移動・流通によって存立している。東京のように海洋や河川を伴う自然地理的条件をもつ都市では、埋め立てや運河の開削、河川の改修などによる空間の社会的生産による産業構造や社会生活の変動への対応が、都市形態、都市構造とその変容を特徴づけている。こうした形態と構造をもつ現代の都市では、異なる移動速度や交通規模に規定された社会的活動のレイヤーが重層し、また高速の移動体系の高密度化と重層化は広域的な移動・交通距離を短縮することによって、都市という場所的・空間的な社会のスケールを複層的に拡張している。また、このような大規模化した都市と、そのような都市を擁する社会の存立を支えるためのインフラ施設が臨海部を中心に生産された空間に集積されると共に、都市活動が生み出す廃棄物などにより形成された埋立地が新たな都市空間となり、さらに産業構造の転換によってそれらの空間が商業・消費のための空間や居住空間へと転換されるなどによって、臨海部という「都市の最中心部の周縁的空間」には、巨大なスケールの空間や施設が並存する広大な空間が生み出されている。こうした存立構造と形態をもつ現代大都市を社会学的に理解するためには、多様な速度とスケールをもった空間の産出と変容のメカニズムと、そのような空間と社会的諸活動を接続させる時間的-空間的なコードやイメージの生成と変容の過程を解明し、その総体を複数の速度、スケール、レイヤーの相互作用の構造として記述する理論と方法が必要である。また、これまでの社会学的な都市研究では「空間」は、地理的平面における社会的な機能や意味の水平的な布置構造としてもっぱら記述・分析されてきたが、臨海部・湾岸における高層建築や、配送センターや競技場、コンベンションセンターなどの巨大な容積をもつ“ビッグな空間”の施設群は、二次元的な平面だけではなく三次元的な空間として都市空間を対象化し、三次元的な拡張や拡大が都市の社会的な諸活動や都市経験をどのように編制するのかを理解するための理論と方法の必要性を提起している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計35件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 若林幹夫	4. 巻 1192
2. 論文標題 有限、無限、永遠 いま・ここ に あること を意味づけるもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 90 - 100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 34
2. 論文標題 近代都市のジェンダー秩序とその現代の変容 -- 『ガールズ・アーバン・スタディーズ』への注釈 --	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本女子大学 紀要 人間社会学部・国際文化学部	6. 最初と最後の頁 35 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 -
2. 論文標題 ジェンダー平等について「もう聞き飽きた」というなら、男女で“通勤経験”が全く異なることを考えてほしい	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Merkmal (https://merkmal-biz.jp/post/53398)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 距離感・脱皮する都市・スケール	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 雨のみちデザイン (http://amenomichi.com/shuui ron/nango4.html)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林幹夫・広場沈・kado・宮崎水鏡・actus	4. 巻 2
2. 論文標題 「私たちの都市」を書くために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 12-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林幹夫	4. 巻 357
2. 論文標題 空間の変動と場所の生成 社会学の視点から見る空間、場所、計画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 40
2. 論文標題 書評：後藤範章編著『鉄道は都市をどう変えるのか？：交通インパクトの社会学』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本都市社会学年報	6. 最初と最後の頁 221-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 クリスティアン・ディマ, 谷川拓, 田中大介, 本間友, 小林博人	4. 巻 1269
2. 論文標題 特集アフターコロ ナのTOKYO論 座談会 コロナ禍を経て明日の東京に暮らす	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三田評論	6. 最初と最後の頁 10-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 -
2. 論文標題 ゲーム感覚の「街歩きイベント」が近年大盛況なワケ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Merkmal (https://merkmal-biz.jp/post/33630)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 立体交差する空間の表象ー映画『ジオラマボーイ・パノラマガール』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雨のみちデザイン (http://amenomichi.com/shuui ron/nango1.html)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 バーチャル素材化する渋谷	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雨のみちデザイン (http://amenomichi.com/shuui ron/nango2.html)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 『サザエさん』にみる「ひとり空間」とカウンターカルチャー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 雨のみちデザイン (http://amenomichi.com/shuui ron/nango3.html)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠田恵美	4. 巻 48
2. 論文標題 生活様式としてのアーバンイズムにおいてライフスタイルはいかに遂行されるか：ムック誌『つくばスタイル』に描かれる つくばスタイル からの考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 5
2. 論文標題 現代都市の「境界と侵犯」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MEZZANINE	6. 最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 -
2. 論文標題 「まち」というリアリティの現在形	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 建築討論 (https://medium.com/kenchikutouron)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 -
2. 論文標題 映画『ドライブ・マイ・カー』に登場 往年の名車「サブ900」が物語るクルマ社会“一つの終焉”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Merkmal (https://merkmal-biz.jp/post/8720)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 18
2. 論文標題 COVID-19・ひとり空間・都市	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 RELATIONS (https://relations-tokyo.com/2022/03/23/yoshikazu-nango/)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 5
2. 論文標題 ひとり焼肉店から考える都市の近接性と高密度性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MEZZANINE	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nango, Yoshikazu	4. 巻 -
2. 論文標題 Solitude as a Hinge	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japan Story (https://japanstory.org/perspectives/solitude-as-a-hinge)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 変容した渋谷、失われる寛容さ 「垂直性」が覆う再開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝日新聞デジタル (https://www.asahi.com/articles/ASP7Y5R8BP7VUCVL03S.html)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 -
2. 論文標題 コロナが変えた人とのつながり 多様化したひとり空間	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝日新聞デジタル (https://www.asahi.com/articles/ASP5X5H90P5WUHMCO0V.html?iref=pc_rensai_short_1255_article_2)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林幹夫	4. 巻 6月号
2. 論文標題 東京 風景の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 てんとう虫 / express	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林幹夫	4. 巻 6月号
2. 論文標題 地図と世界とその背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 107-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林幹夫	4. 巻 51
2. 論文標題 重なりと深さ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 TRANSIT	6. 最初と最後の頁 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 130
2. 論文標題 離接化と近隔化が進む、都市のひとり空間	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 city&life	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 69巻3号
2. 論文標題 現代都市の個別化した生活様式 P2Pプラットフォームとシェアリングエコノミーの行方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 5月号
2. 論文標題 社会学の空間論的転回とマテリアリティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 20 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 2月26日 j
2. 論文標題 書評：都市に聴け -- アーバン・スタディーズから読み解く東京	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 読書人	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後由和	4. 巻 2月号
2. 論文標題 オリンピックが変える都市の姿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 AXIS	6. 最初と最後の頁 58 - 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 56
2. 論文標題 仏訳改訂版:現代日本のコンビニと個人化社会 : 情報化時代における「ネットワークの消費」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Ebisu	6. 最初と最後の頁 133 - 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 29
2. 論文標題 情報化する社会 / 体験化する都市 日本社会における「イベント」概念の 歴史的形成と現代的変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 人間社会学部	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 1
2. 論文標題 まちあるき : ゆるい速度と集合がつくるまち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SD2019	6. 最初と最後の頁 88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中大介	4. 巻 1
2. 論文標題 モール：大型商業施設という環境 センターからモールへ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SD2019	6. 最初と最後の頁 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後 由和	4. 巻 395
2. 論文標題 都市の「仕切り」考。	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南後 由和	4. 巻 407
2. 論文標題 モバイル・メディアと都市	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 30 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 コロナ禍による日本の都市の ひとり空間 の変容
3. 学会等名 国際ワークショップ「パンデミック時代前後における親密圏」, ドイツ日本研究所 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅生鴨・草野絵美・田中元子・南後由和, 司会 宇野常寛
2. 発表標題 渋谷再発見2022 古くて新しいこの街から、文化を生み出す公開会議
3. 学会等名 渋谷ヒカリエ 8/COURT (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加治屋健司・清水知子・鴻野わか菜・南後由和・毛利嘉孝
2. 発表標題 都市と芸術：東京ピエンナーレを考える1970-2020/21
3. 学会等名 LIVE RELATIONS! vol.01 DAY2, 東京ピエンナーレ2020/2021 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小泉秀樹・吉村有司・熊越祐介・南後由和・筒井祐治・山口堪太郎
2. 発表標題 都市の多様性からみたサスティナブルなまちづくり ビッグデータを用いた新たな都市評価の可能性
3. 学会等名 東京大学まちづくり研究室・東急株式会社主催オンラインイベント, カタリストBA (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門脇耕三・齋藤精一・南後由和・宇野常寛
2. 発表標題 都市の未来を(コロナ禍を通して)考える
3. 学会等名 遅いインターネット会議, SAAI (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊遼平・小原和也・南澤孝太・南後由和, ファシリテーター 柳原一也
2. 発表標題 ヴァーチャル/フィジカルな都市空間におけるUXを考える
3. 学会等名 MTRL FUTURE SESSION vol.01 #HAPTIC DESIGN (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 南後由和
2. 発表標題 withコロナ時代のひとり空間
3. 学会等名 scene 特別トークイベント「ひきこもる都市」vol.5 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上田唯人・南後由和・宇野常寛, 司会 門脇耕三
2. 発表標題 生まれ変わった渋谷から都市の未来を考える
3. 学会等名 PLANETS大忘年会2019 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤昭彦・広井良典・南後由和・青柳由則・西尾京介・小泉秀樹
2. 発表標題 パネルディスカッション「都市の未来と未来の都市計画」
3. 学会等名 都市計画法制定100周年記念事業「都市計画のこれまで、これから」, 都市計画コンサルタント協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 若林 幹夫
2. 発表標題 Malls and Bay Area: Sociological Reflections on Contemporary Urban Fabric from the Tokyo Metropolitan Area
3. 学会等名 The Third Annual Conference of Network Society: Intelligent Urban Fabric (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 大介
2. 発表標題 都市のなかの物流 / 物流のなかの都市
3. 学会等名 Logistics Architecture 研究会フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南後 由和
2. 発表標題 そして家族になる 都市はやわらかい共同体をつくれるか
3. 学会等名 ミサワホーム株式会社Aプロジェクト室・トヨタホーム東京株式会社主催シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 大貫恵佳、木村恵理子、田中大介、塚田修一、中西康子、楠田恵美他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 292
3. 書名 ガールズ・アーバン・スタディーズ	

1. 著者名 若林幹夫・原広司他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Canadian Centre for Architecture	5. 総ページ数 64
3. 書名 Hiroshi Hara with Mikio Wakabayashi and others - Meanwhile in Japan	

1. 著者名 塚田修一、田中 大介、楠田 恵美、近森高明他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 296
3. 書名 大学的相模ガイド	

1. 著者名 若林 幹夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 204
3. 書名 ノスタルジアとユートピア	

1. 著者名 南後由和・西田編集長・中島りか・ミズタニタマミ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 tmyc	5. 総ページ数 91
3. 書名 都市の見る夢	

1. 著者名 横浜国立大学都市科学部編, 若林幹夫、南後由和、吉原直樹、他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典	

1. 著者名 若林 幹夫、立岩 真也、佐藤 俊樹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 430
3. 書名 社会が現れるとき	

1. 著者名 藤村 龍至、南後 由和	4. 発行年 2018年
2. 出版社 TOTO出版	5. 総ページ数 456
3. 書名 ちのかたち 建築的思考とその応用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>田中大介「顕在化した「都市の危機」：情報化社会における集中と分散の両義性」 https://book.gakugei-pub.co.jp/campaign/covid-19_tanaka/ 田中大介「感染症リスクが縁どる社会 都市と距離をめぐるジレンマをめぐって」 https://medium.com/kenchikutouron/ Poking Holes in Modern Space https://www.cca.qc.ca/en/articles/72728/poking-holes-in-modern-space 近代の空間に孔を開ける https://www.cca.qc.ca/en/articles/72728/poking-holes-in-modern-space/alt-lang/ja いまこそ「トランスディプリナリティ」の実践としてのメディアを：経験知、生活知の統合をめざして http://10plus1.jp/monthly/2020/03/issue-02.php それぞれの「距離」感 http://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/113481.html 都会人が「住みたい街ランキング」を必要以上に気にする理由 https://urbanlife.tokyo/post/29966/ http://www.caa-ins.org/archives/2931 http://wedge.ismedia.jp/articles/-/12620</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 大介 (Tanaka Daisuke) (10609069)	日本女子大学・人間社会学部・教授 (32670)	
研究分担者	南後 由和 (Nango Yoshikazu) (10529712)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	楠田 恵美 (Kusuda Emi) (60875417)	駒沢女子大学・人間総合学類・講師 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関